

論文

支婁迦讖訳『般舟三昧経』第二章

——和訳と訳注——

吹田隆徳

〔抄録〕

『般舟三昧経』(T. 418)は支婁迦讖によって179年に訳出されたと伝わる初期大乘経典である。異本の中で最も古い形態を留めており、〈般舟三昧経〉の研究における第一の資料となる。また、訳出された年代の早さから、初期大乘を研究する上でも押さえておかなければならない資料である。第二章を取り上げるのは、これが般舟三昧の説明を担う重要な章だからである。近年ではこの章が原初形態を示しているという見解が提示されており、学界の注目度も高い。この第二章の研究により、原初的な般舟三昧のあり方を追究し、この三昧が如何なる修道論上の要請に答えるべく生み出されたのかを明らかにすることができる。そして最終的に、編纂者たちの思想的立場といった初期大乘の研究に重要な情報を提示することが可能である。本稿はその研究の前段階として『般舟三昧経』第二章の和訳と註を作成する。

キーワード：支婁迦讖、初期大乘、浄土教、阿弥陀仏、念仏

はじめに

本稿は、支婁迦讖が179年に訳したと伝わる『般舟三昧経』(T. 418)第二章の和訳と訳注である⁽¹⁾。本経の第二章は「行品」と呼ばれ、対告者の颯陀和(**Bhadrapāla*)に対して、世尊が般舟三昧とは何かを説明する。これ以外の章では詳細な説明が行われていないため、この章が般舟三昧を研究する上での焦点となる。また、本経の訳には支婁迦讖本人と後代の訳者による部分が混在することがHarrison 1979によって指摘されているが、この第二章が支婁迦讖の訳出した部分であり、諸本の内でも特に高麗版が原形を留めている可能性が高いとみられている(cf. Harrison 1990, 221-249)。さらに末木1989は、各章の構成や内容の比較に基づいて、第二章とそれ以降には成立史的な段階が見られることを指摘し、この第二章を原初形態として位置づける。そして、これまでの研究の反省として、異なる段階に属する章を一纏めにす

るのではなく、この部分だけを他から切り離して研究する必要性を提起している。したがって、この第二章の研究によってこそ、原初的な般舟三昧のあり方を追究することができるということになる。本経を和訳するにあたって、第二章を取り上げたのは以上の様な理由による。

今回は、紙幅の都合上、第二章の前半部（T 13, 904b24-905a3）までの和訳となる。ここでは複数の項目を挙げて般舟三昧を説明する。三昧の説明に項目を列挙するという形式を取るのには〈三昧王経〉や〈首楞嚴三昧経〉などにも見られる。しかし、どの経典でも所説の三昧と関連性のない項目を挙げて説明することで知られ、特に大乘の三昧を説く経典に見られる不可解な部分となっている⁽²⁾。和訳に際しては、異本（Tib., T. 416, T. 417⁽³⁾, T. 419）と比較し、異同などの問題が見られる場合は必要に応じて詳細を注記しておいた。さらに、同じ支婁迦讖訳とされる『道行般若経』に同一の訳語が認められる場合、『道行般若経詞典』（Karashima 2010）からの引用を注記した。また底本に関しては、高麗版が原形を留めていると指摘されていることを踏まえ、『高麗大蔵経』の読みに従って翻訳し⁽⁴⁾、他に『宋版磧砂大蔵経』第七卷（No. 69）などを参照した。尚、既に出版されている翻訳研究に関して、本経に限って挙げると、Paul Harrison による英訳（Harrison 1998）がある⁽⁵⁾。

和訳と訳注

（T 13, 904b24-b29）仏陀は颯陀和（**Bhadrapāla*⁽⁶⁾）菩薩に〔次のように〕告げた。

「もし、ある菩薩がおり、彼の思う対象（仏）が現在するならば、十方の仏に集中力を向けよ。〔このようにして〕三昧に入るならば、あらゆる菩薩行（**bodhisattva-caryā*⁽⁷⁾）を会得する。〔般舟〕三昧とは何かという⁽⁸⁾、(1) 仏を対象とする作意（**manasikāra*⁽⁹⁾）でもって仏に向かうことである。(2) 心（**citta*）と自覚（**smṛti*）とに乱れがないことである⁽¹⁰⁾。(3) 智慧（**prajñā*⁽¹¹⁾）を得てから精進を捨てないことである。(4) 善知識たちと共に空〔性〕を修習することである。(5) 睡眠を除くことである。(6) 群がらないことである。(7) 悪友たちを避けることである。(8) 善知識たちに近づくことである。(9) 乱れることなく精進することである。(10) 食事に満足を知ることである。(11) 衣服を貪らないことである。(12) 寿命を惜しまないことである。

（T 13, 904b29-c04）(13) 孤独にして親族を避けることである。(14) 故郷を離れることである。(15) 慈しみ（**maitrī*）を修習し、哀れみ（**karuṇā*）と喜び（**muditā*）とを修得して、平等性（**upekṣā*）をもって行うことである⁽¹²⁾。(16) 煩悩を棄てることである。(17) 禪定を修習することである。(18) 容色に付き随わないことである。(19) 〔五〕蘊に固執しないことである⁽¹³⁾。(20) 〔十二〕処に執着しないことである⁽¹⁴⁾。(21) 四大に固執しないことである⁽¹⁵⁾。(22) 自覚（**smṛti*⁽¹⁶⁾）を失わないことである。(23) 〔高貴な〕生まれを貪らないことである⁽¹⁷⁾。(24) 不浄なものを理解することである。(25) 十方の人を見捨てないことである

る。(26) 十方の人を活かすことである。

(T 13, 904c04-c10) (27) 十方の人をこれは我がものであると思うことである。(28) 十方の人を我がものでないと思うことである。(29) あらゆるものに固執しないことである⁽¹⁸⁾。(30) 戒を無闇にもとめないことである。(31) 三昧の実践を繰り返すことである。(32) 經典の読誦を望むことである。(33) 犯戒に陥らないことである。(34) 三昧を失わないことである。(35) 教えを疑わないことである。(36) 仏に反しないことである。(37) 教えを却けないことである。(38) 比丘の僧団を乱さないことである⁽¹⁹⁾。(39) 妄語を離れることである。(40) 聖者たちを助けることである⁽²⁰⁾。(41) 愚か者たちを避けることである。(42) 世間の話は喜ばず、聞くことを望まないことである。(43) 出世間の話は詳細に聞くことを望み、そして喜ぶことである。(44) 理由によって畜生に生じたならば、〔話自体〕を聞こうと望まないことである⁽²¹⁾。

(T 13, 904c10-c14) (45) 六和〔敬法〕を修習することである⁽²²⁾。(46) 五〔解脱処〕を行うことである⁽²³⁾。(47) 十悪を離れることである。(48) 十善を修習することである。(49) 九惱を理解することである。(50) 八精進を行うことである。(51) 八懈怠を捨てることである。(52) 八勝処 (**abhibhvāyatana*) を修習することである⁽²⁴⁾。(53) 九想観と八大人覺を修習することである⁽²⁵⁾。そして、(54) 禪定に執着しないことである。(55) 学んで驕らないことである⁽²⁶⁾。(56) 我慢を捨てることである。(57) 説法を聞くことである。(58) 教えを聞くことを望むことである。(59) 教えを実践することを望んで、時の経過に惑わされないことである。

(T 13, 904c14-c19) (60) 身体の特徴に執着しないことである。(61) 十方の人から離れて執着を望まないことである。(62) 寿命を貪らないことである。(63) 〔五〕蘊を理解して随わないこと、あるいは、(64) ものに随わないことである。(65) 涅槃を求めて輪廻は望まないことである⁽²⁷⁾。(66) おおいに輪廻を畏れることである。(67) 〔五〕蘊を賊のようであると思うことである。(68) 四大を〔毒〕蛇のようであると思うことである。(69) 十二処を空〔村〕のようであると思うことである。(70) ながく三界にいても安穩を得ないことである。(71) 涅槃の獲得を忘れないことである。(72) 貪欲を望まないことである。(73) 輪廻の放棄を願うことである。

(T 13, 904c19-c25) (74) 人の諍いに随わないことである。(75) 輪廻に墮ちることを望まないことである。(76) 常に仏の前に立つことである。(77) 身体を受けても夢の如きものだと思うことである。(78) 信をもつことで二度と疑わないことである。(79) 心に違和感がないことである⁽²⁸⁾。(80) あらゆる表象 (**saṃjñā*)⁽²⁹⁾ が滅することである。(81) 過去、未来、現在を等しいと考えることである。(82) 常に諸仏の功德を憶念 (**anu-Smṛ*) することである⁽³⁰⁾。(83) 帰依して仏に依ることである⁽³¹⁾。(84) 三昧に自在なことである。(85) 仏の身体の特徴にとらわれないことである。(86) ものはすべて等しいと考えることである。(87) 世間

と争いのないことである。(88) やるべきことに対して言い争いがなくことである。(89) 原因と結果によって〔ものごとが〕生じていると把握し理解することである。(90) 仏地〔という修行階梯〕から〔無上正等覺に〕至るに、法に対する容認（**ksānti*）を得ることである⁽³²⁾。

（T 13, 904c25-905a03）(91) 法界に入ることである⁽³³⁾。(92) 空なる我（**ātman*）を理解すること⁽³⁴⁾、人は存在するのでもなく、滅するのでもないと考えることである。(93) みずから涅槃を証得することである。(94) 智慧の眼が清浄なことである。(95) すべてが不二である〔と見ること〕である。(96) 菩提心に中間も始終もないことである。(97) すべての仏と心が一つになることである⁽³⁵⁾。(98) 愚かさがなく〔状態に〕入ることである。(99) 智慧に責められる点がないことである。(100) みずからで覺りの心を得たのだから、仏の智慧は他に依らないもの〔と見ること〕である。(101) 善知識を得て、〔彼を〕仏のように思うことである。(102) 心に変化がないことである。〔すなわち、心が〕いかなるときも菩薩にあり、〔そこから〕離れる時がないことである。(103) たとえあらゆる悪魔でも動かすことはできないことである。(104) あらゆる人は鏡の中の像のようである〔と見ること〕である⁽³⁶⁾。(105) あらゆる仏を見るのが昼間のように〔明瞭に見えるように〕なることである。すべて〔以上の〕あり方（*dharma*⁽³⁷⁾）にしたがって、清浄な菩薩行は得られるのである」と。

（未完）

〔注〕

- (1) 和訳と訳注の作成にあたっては、五島清隆先生から多くのご指摘を賜りました。ここに感謝申し上げます。
- (2) この不可解な部分に関しては Skilton 2002 による考察がある。
- (3) T. 417 における対応箇所（T 13, 898b10-899a08）は他の異本とは全く異なっており、一句三字からなる偈頌の形式に改変されている。
- (4) 高麗版に関しては『高麗大藏経』第七巻と『高麗大藏経初刻本輯刊』巻五巻に所収の『般舟三昧経』を参照した。
- (5) 異本（T. 417）並びに藏訳を対象とした翻訳研究は多く出版されている。まず、T. 417 の翻訳としては櫻部 1974（= 山口 1974, 557-578. 抄訳）、Inagaki 1989（英訳/完訳）、能仁 2018（完訳）がある。また、藏訳からの翻訳として Harrison 1990（完訳）、林 1994（完訳）、梶山 1992（抄訳）がある。さらに、漢訳異本に共通する部分を抽出して訳したものとして西 1972（抄訳）がある。
- (6) この *Bhadrāpāla* が本経における対告者である。この人物の詳細については Harrison 1990, 6 fn.7 を参照。異本における訳語に関して、T. 419 では「拔跛」と音写され、T. 416 では「賢護」と訳される。また、藏訳は *bzang skyong* と訳す。
- (7) 原文は「一切得菩薩高行」。「菩薩高行」という訳語は竺法護訳『正法華経』に出る。cf. 『正法華経』 T 9, 122c29-123a01: 普當學菩薩高行。得至如來至眞等正覺。
SP (kern ed., 378, 7): sarvā yūyam bodhisattvacaryām caradhvam bhaviṣyatha yūyam tathāgatā arhantaḥ samyak sambuddhāḥ.
- (8) 原文は「何等爲定意」。異本の対応箇所を参照すると、T. 419 は「何等爲一法。見在佛定意名爲止定住者」、T. 416 には「云何名爲菩薩思惟一切諸佛現前三昧」とある。また、藏訳には *de la daltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin de gang zhe na* とある。

- (9) 原文は「從念佛因緣向佛」。「念」は『道行經』に *manasi-Kṛ* の訳語として出る。また、藏訳対応箇所には *sangs rgyas la dmigs pa'i sems yid la byed pa* とある。

cf. Karashima 2010, 340: 念 (niàn)(3) “mental concentration, mental application”#
HD. 7.421.*

Lk. 456b24. 若復有菩薩壽如恒中沙劫布施如前，持戒具足。若復有菩薩求深般若波羅蜜，從念起，說經，其功德出彼上。(p)

AS. 171.23 = R. 344.18 = AAA. 703.15. *manasikāra* ~ (“mental concentration”); ZQ. 496a15. 念; Zfn. 529a23. 念 |般若波羅蜜| 起; not found at Kj. 566b16.; not found at Xz(I). 829c7.; not found at Xz(II). 903c6.; Sh. 644c15. 如理作意思惟; Tib.Pk. 204a7 = D. 189b7. *yid la byed pa*.

Lk. 457a12. 是本無不增不減。常隨是念，不遠離，是即為近阿耨多羅三耶三菩提。(p)

AS. 174.26 = R. 351.3 = AAA. 715.8. *manasikāra* ~; ZQ. 496b15. 念; Zfn. 529c23. 念; Kj. 567a18. . 念; Xz(I). 830c25. 作意; Xz(II). 904b28. 作意; Sh. 646a16. 作意; Tib.Pk. 208a6 = D. 193a7. *yid la byed pa*.

- (10) 原文は「念意不亂」。「念意」は藏訳相当箇所には *sems mi g-yeng ba / dran pa nye bar gnas pa* とあるのを鑑み、念 (**citta*) と意 (**smṛti*) の二項目と理解する。T. 419 は「念意不邪冥不亂」となっている。他に「意」が *dran pa* (**smṛti*) と対応する例として註 16 を参照。

- (11) 原文は「從得點不捨精進」。「點」は『道行經』にも出る。また、藏訳対応箇所には *shes rab thob pa / brtson 'grus mi gtong ba* とある。

cf. Karashima 2010, 528-529: 點 (xià) “wise, clever; wisdom”

HD. 12.1363a(1)(抱樸子，後漢書 etc.); ZY 251(1996, No.2): 141(安世高譯，支婁迦讖譯)，Fang Yixin 1997: 145f.(安世高譯，支婁迦讖譯 etc.)，Zhou/Wang 1998 : 32(顏氏家訓)

Lk. 447a16. 譬若男子得象，觀其脚。於須菩提意云何？是男子為點不？須菩提言：“為不點。”(p)

AS. 116.17 = R. 235.8 = AAA. 504.6. *pañḍita-jāṭīya* ~ (“intelligent” [cf. AsP.tr.II 163 = AsP.tr. 84]); ZQ. 490c2. 點 (←點: a misprint of the Taisho Edition); not found at Zfn.; Kj. 556a19. 智; Xz(I). 810c16. 點; not found at Xz(II). 891a28.; Sh. 625a22. 智; Tib.Pk. 139b5 = D. 129b7. *mkhas pa'i rang bzhin can*.

Lk. 456a2. (An irreversible bodhisattva) …心大無有極，安隱堅住其地，無有能降之者。作是住，無有能過是點者。(p)

AS. 168.9 = R. 337.13 = AAA. 689.19. (*asamhārya* ~) *jñāna* ~ (“his cognition [becomes insuperable]” [AsP.tr.II 206 = AsP.tr. 128]); not found at ZQ. 495c13.(無能過者); not found at Zfn. 528b17.(無有能過); Kj. 565c1.(不可壞) 智慧; Xz(I). 828b12.(無動無退轉) 智; Xz(II). 902c9 = Xz(I); Sh. 643b24.(不壞) 智; Tib.Pk. 200b2 = D. 186b2. (*mi 'phrogs pa'i*) *ye shes*.

- (12) 原文は「習等意得悲喜心護行」。藏訳対応箇所には *byams pa la kun tu sten pa / snyin rje thob pa / dga' ba la gnas pa / btang snyoms sgom pa* とあり、漢訳異本を参照しても、ここは四無量心を説く部分となっている。T. 419 が *upekṣā* に当たる部分を「已行護心」と訳していることから、原文中の「護」が *upekṣā* とみるべきであろう。しかし、『道行經』では *muditā* の訳語として出るようである。

cf. Karashima 2010, 218-219: 護 (hù)(1) “care, protection; takes care of, protects” (a translation of BHS. *muditā* “joy, sympathetic joy”)

HD. 11.436b(2)(史記 etc.);

Lk. 439b8. 三千大千國土人悉念慈、哀、護、等心，無過菩薩、摩訶薩上頭所施，是即為極尊。(p)

AS. 79.9 = R. 155.16 = AAA. 361.5. *catur* ~ *apramāṇa* ~ (“the four Unlimited” [AsP.tr.II 131 = AsP.tr. 50]); ZQ. 487a8. 四等心; Zfn. 521a10. 慈、哀、等、護心; Kj. 549a7. 慈、悲、喜、捨心; Xz(I). 795b24. 四無量; Xz(II). 882b11. 四無量; Sh. 611a16. 四無量行; Tib. Pk. 94a3 = D. 87b7. *tshad med pa bzhi*.

Lk. 461c19. (The true *bodhisattva-mahāsattvas*) 是彼壞菩薩輩所在彼處，常當持慈心向，常當哀

之，令安隱，愍傷之，慈念之。常當自護，自念：“使我無得生是惡心。……” (p)

≠ AS. 196.10 = R. 395.14 = AAA. 784.4. *mudita-citta* ~ (“a thought of joy in sympathy” [AsP.tr.II 235 = AsP.tr. 157]); ZQ. 499b4 = Lk; Zfn. 534c17. 護之; Kj. 571b12. 喜; Xz(I). 839b10. 喜; Xz(II). 910a17. 喜; Sh. 653c18. 大喜心; Tib.Pk. 232b3 = D. 216a4. *dg' ba'i sems*.

- (13) 原文は「不受陰」。「受」は『道行經』に *pari-Grah* の訳語として出る。尚、藏訳相当箇所には *mam par jig pa* とある。

cf. Karashima 2010, 454-456: 受 (shòu)(1) “embraces, holds, grasps; perceives”

HD. 2.880b(2)(詩經 etc. “receives”)

Lk. 426a26~29. 色不受; 痛痒、思想、生死、識不受。不受色者，爲無色。不受痛痒、思想、生死、識者，爲無識。般若波羅蜜不受。何以故不受? 如影無所取。無所得故，不受。(p)

AS. 5.1f. = R. 8.13f. = AAA. 49.2f. *a-parigrhita* ~ ... *a-parigrhita* ... *a-parigrhita* ... *a-parigrhita* ... *a-parigrhita* ~ (“is not appropriated” [AsP.tr.II 85 = AsP.tr. 3]); ps-ZQ. 479b1. 以不取(色)。不取(痛想行識)。…(色)無彼受。(痛想行識)無有彼受。……(明度之道)無有彼受。…(吾 [s.e. for 不?])受; Zfn. 509a13f. 不受…不受…不受; Kj. 537c9f. 無受…無受…無受; Xz(I). 764b11f. 不可攝受…不可攝受…不可攝受; Xz(II). 866b21f. 不應攝受…不應攝受…不應攝受…不可攝受; Sh. 588a6f. 不受…不受…不受; Tib.Pk. 5a5f. = D. 4b6f. *yongs su gzung ba ma mchis so ... yongs su gzung ba ma mchis so*.

Lk. 426b3. 復次，舍利弗！薩芸若不受。何以故？菩薩不當持想視薩芸若。設想視者，爲不了，爲如餘道人，不信薩芸若。(p)

AS. 5.6 = R. 8.20 = AAA. 50.6. *a-parigrhita* ~ ; ps-ZQ. 479b9. 無彼受; Zfn. 509a18. 不受; not found at Kj. 537c13; Xz(I). 764b18. 不攝受; Xz(II). 866b29. 不攝受; Sh. 588a12. 無所取; Tib.Pk. 5b2 = D. 5a2. *yongs su gzung ba ma mchis te*.

Lk. 426b7. 正使餘道人信佛，信佛已，反持小道入佛道中。入佛道中已，不受色。痛痒、思想、生死、識不受。(p)

AS. 5.9 = R. 9.1 = AAA. 50.18. *parigrhñite* (“takes hold of [form, etc.]” [cf. AsP.tr.II 85 = AsP.tr. 3]); ps-ZQ. 479b12. 取; Zfn. 509a20. 受; Kj. 537c16. 受; Xz(I). 764b24. 取; Xz(II). 866c6. 取; Sh. 588a15. 受; Tib.Pk. 5b3 = D. 5a3. *yongs su (mi) 'dzin*. (他に三例あり)

- (14) 原文は「不入衰」。「入」は『道行經』に *abhi-ni-Viś* の訳語として出る。尚、藏訳対応箇所には *mngon par mi chags* とある。また、「衰」は『道行經』において *indriya* の訳語として出るようである。

cf. Karashima 2010, 389: 入 (rù)(3) “absorbs”(?) Lokakṣema rendered abhiniveśa (“strong attachment” [BHSD , s.v.]), which is a derivative of the verb *viś* (“to enter”), literally as 入 (“enters”).

Lk. 451a23. 色、痛痒、思想、生死、識，不受不入; 須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、薩芸若道，不受不入。(p)

AS. 140.10 = R. 281.15 = AAA. 576.24. *-abhiniveśa* ~ ... *-abhiniveśa* ~ (“strong attachment” [BHSD , s.v.]); ZQ. 492b-3. 入……入; not found at Zfn.; Kj. 559c10. 著; Xz(I). 819a1. 執著……執著; Xz(II). 896a29 = Xz(I); Sh. 633b8. 著; Tib.Pk. 168b8 = D. 156b3. *mngon par (ma) zhen bar bya ba ... mngon par (ma) zhen bar bya ba*.

Lk. 451a26. 佛言：“云何，須菩提！若見（←見若）羅漢所入處不？” (p)

AS. 140.16 = R. 282.2 = AAA. 577.17. *yatra parigrahaṃ vā 'bhiniveśaṃ vā kuryāḥ* (“[Do you view Arhatship as a real dharma which] you could take hold of, or settle down in?” [cf. AsP.tr.II 182 = AsP.tr. 103]); ZQ. 492c1. 所入; not found at Zfn.; Kj. 559c15. 可受可著; Xz(I). 819a9. 可攝受執著; Xz(II). 896b5 = Xz(I); Sh. 633b13 = Kj; Tib.Pk. 169a5 = D. 156b6. *gang la yongs su 'dzin pa'am mngon par zhen par byed pa*.

Lk. 451a27. 須菩提言：“不見。天中天！不見是法我所入處。” (p)

AS. 140.18 = R. 282.4 = AAA. 577.23. *yaṃ pariṅṛhṇīyām abhiniveśeyam vā 'rhattvam* (“[I do not view Arhatship as a real dharma which] one could take hold of, or settle down in” [cf. AsP.tr.II 182 = AsP.tr. 103]); not found at ZQ. 492c1.; not found at Zfn.; Kj. 559c16. 可生著; Xz(I). 819a10. 可於其中攝受執著; Xz(II). 896b6 = Xz(I); Sh. 633b15. 亦(不)可受亦(不)可著; Tib.Pk. 169a6 = D. 156b7. *gang la yongs su 'dzin pa'am mngon par zhen par 'yur pa.* (他二例あり)

cf. Karashima 2010, 312: 六衰 (liù shuāi) “the six kinds of decay, decline, degeneration, calamities” not found at HD. 2.40; cf. Soothill 638 (“the six ruiners, i.e. the attractions of the six senses, idem 六塵, 六賊”), Nakamura 1456a = Nakamura2 1769a (= 六塵 *ṣaḍ viśayāḥ* “six spheres [of the senses]; 六入 *ṣaḍ āyatanāni* “the six senses [sense-organs and their respective objects]”, BHS D, s.v. *āyatana*)

Lk. 427a24~26. 幻如色。色六衰、五陰。如幻痛痒、思想、生死、識。作是語，字六衰、五陰。

(p)

AS. 9.8., 10 = R. 17.3, 5 = AAA. 72.16, 19. *ṣaḍ-indriya* ~ (“the six sense organs” [AsP.tr.II 88 = AsP.tr. 6]); ps-ZQ. 480b18. 六根; Zfn. 510a15., 16. 六衰; Kj. 538c4. 六情; Xz(I). 766a15. 六根; Xz(II). 868a7. 六根; Sh. 589b25. 六根; Tib.Pk. 10a5 = D. 9b7. *dbang po drug.*

Lk. 474a2. 爾時，即於坐上得六萬三昧門。何等爲三昧門？……譬如大海水不可量多慧所入三昧、在須彌山功德莊飾三昧、五陰六衰無形觀三昧、…………… (p)

not found at AS. 255.6 = R. 516.15 = AAA. 977.10; ZQ. 505c6. (五陰四大) 六衰 (無形觀定); not found at Zfn.; not found at Kj. 584c20; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 674b24.; not found at Tib.Pk. 304b3 = D. 279a3.

- (15) 原文は「不念四大」。T. 419 は「諸大」、T. 416 では「諸界」、藏訳には *kham s rnams* とあるが、この場合の諸界は六界 (または、その中の四界) を指す。尚、「四大」という訳語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 462: 四大 (sì dà) “the four great (physical elements which constitute the material world, viz. earth, water, fire, and air[or wind])”

HD. 3.570b(明報應論, 圓覺經); Krsh(2001). 253;

Lk. 470a20. 四大本無形。菩薩隨般若波羅蜜教，當如是。(p)

not found at AS. 235.4~29 = R. 475.6~477.8 = AAA. 893.20~900.22; ZQ. 503b16. 四大; not found at Zfn.; not found at Kj. 579b15~c13; not found at Xz(I). 859c-14~860c19; not found at Xz(II); not found at Sh. 667a17~b25; not found at Tib.Pk. 279b3~281a1 = D. 257b5~258b6.

- (16) 原文は「不失意」。藏訳相当箇所には *dran pa mi g-yeng ba* とある。
 (17) 原文は「不貪性」。藏訳対応箇所には *rigs smra bas snyems par mi byed* とある。「性」には *kula, jāti, gotra* などの原語が想定される。cf. “性” *Digital Dictionary of Buddhism*, <http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=性>.
 (18) 原文は「不欲受」。藏訳対応箇所には *yongs su mi 'dzin pa* とある。原文中の「受」が *pari-Grah* の訳語として『道行經』に出ることについては註13を参照。
 (19) 原文は「不亂比丘僧」。「比丘僧」の訳語は『道行經』にも出る。

cf. Karashima 2010, 36: 比丘僧 (bī qiū sēng; EH. bjiəi[bjiəi-] khju səng > QYS. bi[bi-] khjəu səng a transliteration of Skt. *bhikṣu-saṅgha* (“a community of Buddhist monks”)) Cf. 摩訶比丘僧 (mó hē bī qiū sēng).

not found at HD. 5.262.; DK. 6.802b(清代);

Lk. 432b2. 佛語釋提桓因：“云何，拘翼！閻浮利人中有幾所人，信佛，信法，信比丘僧 (v.l. 比丘僧者)？” (p)

AS. 30.7 = R. 59.21 = AAA. 213.14. *saṅgha* ~; ZQ. 484a23. 比丘僧; Zfn. 514c7. 比丘僧; Kj. 542c11. 僧; Xz(I). 775b7. 僧; Xz(II). 873c20. 僧; Sh. 596b5. 僧; Tib.Pk. 35b3 = D. 33b5. *dge*

'*dun*.

Lk. 441c13. 斷比丘僧者，爲受不可計阿僧祇之罪。(p)

AS. 92.13 = R. 183.18 = AAA. 401.18. *tathāgata-srāvaka-saṃgha* ~ (“the community of the disciples of the Tathāgata” [cf. AsP.tr.II 141 = AsP.tr. 60]); ZQ. 488b1. 比丘僧; Zfn. 523b7 = Lk; Kj. 551a29. 僧寶; Xz(I). 801b25. 僧寶; Xz(II). 885a14. 僧; Sh. 615c20. 聲聞一切僧寶; Tib.Pk. 111a6 = D. 103b5. *de bzhin gshegs pa'i nyan thos kyi dge 'dun*.

Lk. 451a12. 佛說是經時，五百比丘僧、二(←三)十比丘尼皆得阿羅漢。(p)

AS. 139.26 = R. 280.13 = AAA. 575.3. *bhikṣu-* (“monk” [AsP.tr.II 181 = AsP.tr. 102]); ZQ. 492b-10. 比丘; not found at Zfn.; Kj. 559b24. 比丘; Xz(I). 818c2. 苾芻; Xz(II). 896a13. 苾芻; Sh. 633a20. 苾芻; Tib.Pk. 168a5 = D. 156a1. *dge slong*. (他二例あり)

- (20) 原文は「助道德家」。蔵訳対応箇所には '*phags pa rnams* とある。「道德」という訳語や「○○家」という表現は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 115: 道德 (dào dé) “the virtues of the (Buddha) Path” Cf. 至德 (zhì dé), 有德人 (yǒu dé rén), 有德之人 (yǒu dé zhī rén).

HD. 10.1084a(韓非子 etc.); DK. 11.134c(周易 etc.); Krsh(1998). 87;

Lk. 440a14. 菩薩道德之人，當 (= mss.) ←常) 知：“過去、當來、今現在法無所取、……”(p)

AS. 82.9 = R. 161.19 = AAA. 370.6. *bodhisattva-yānika* ~ *pudgala* ~ (“a person who belong to the vehicle of the bodhisattvas”); ZQ. 487b4. 求闍士道有德人; Zfn. 521c14. 道德之人; Kj. 549c3. 菩薩; Xz(I). 796c17. 菩薩乘善男子等; Xz(II). 882c28. 菩薩; Sh. 612a25. 菩薩、摩訶薩; Tib.Pk. 98a1 = D. 91b1f. *byang chub sems dpa'i theg pa can*.

Lk. 476a6. 是時薩陀波倫菩薩悉受五百女人及五百乘車珍寶，既受，用道德故。既受已，薩陀波倫菩薩欲持上師，……(p)

not found at AS. 256.16 = R. 519.12 = AAA. 979.29; not found at ZQ. 506c23; not found at Zfn.; not found at Kj. 585a29; not found at Xz(I); not found at Xz(II); not found at Sh. 675a9; not found at Tib.Pk. 306a5 = D. 280b2.

cf. Karashima 2010, 248: 家 (jiā) “one (or those) who …”(used after a verb or adjective, or a verbal or adjective phrase, to indicate a specific class of persons).

HD. 3.1458.*; Zhu 160f.(支謙譯 etc.), ZY 251(1996, No.2): 142(安世高譯, 道行般若經), Hu 2002 : 271f.(論衡, 安世高譯); cf. also ZY 318(2007, No.3): 285f.

Lk. 461c4. 須菩提！菩薩當作是知：如擔死人種，無所復中直，反呼是菩薩有短；是爲菩薩怨家；是爲厭菩薩。(p)

∈ AS. 195.27 = R. 394.16 = AAA. 783.1. *bodhisattva-pratirūpaka* (“a mere fake of a Bodhisattva” [AsP.tr.II 235 = AsP.tr. 157]); ZQ. 499a27. 闍士怨家; Zfn. 534c4 = Lk; Kj. 571b5. 似像菩薩; Xz(I). 839a28. 雖似菩薩、摩訶薩相; not found at Xz(II). 910a9; Sh. 653c5. 形像菩薩; Tib.Pk. 232a3 = D. 215b4. *byang chub sems dpa'i gzugs brnyan*.

Lk. 464b11. 若求菩薩道家與求羅漢道人共諍。爾時，弊魔自念：“菩薩離薩芸若遠。離遠，亦不大遠。”菩薩又與菩薩共諍。爾時，弊魔念言：“兩離佛遠。”(p)

AS. 207.30 = R. 420.3 = AAA. 812.12. *bodhisattvo mahāsattvaḥ*; ZQ. 500b22. 闍士; not found at Zfn.; Kj. 573c5. 求佛道者; Xz(I). 845a21. 菩薩、摩訶薩; Xz(II). 913a2. 菩薩; Sh. 657c21. 菩薩乘人; Tib.Pk. 246a2 = D. 228a3. *byang chub sems dpa' sems dpa' chen po*.

- (21) 原文は「從因緣畜生(+生)不欲聞」。難読箇所である。本文ではできるだけ原文に則しての訳出を試みた。直前の項目(42: 世間語不喜不欲聞)と(43: 道語具欲聞亦喜)が人間に生まれた場合を述べたものであり、当該箇所(44)は、理由があつて畜生に生まれた場合を述べたものと理解する。しかし、原文にある「畜生」をどのように理解するかによって文意が異なってくる。異本を参照すると、T. 419には「畜生音遠棄辟」とあり、ここでも「畜生」と訳出している。このことから、Harrisonは原典に *tiracchāna-kathā* に相当する語があつたと想定する。*tiracchāna-kathā* とは

馬鹿話のことである (see Harrison 1990, 27, fn. 5; Harrison 1998, 111 fn.2; PTSD, s.v., *-kathā* “animal talk”; wrong or childish talk in general)。しかし、異本すべてに「畜生」の語が現れるわけではない。T. 416 は「雖聞語言。意不樂聽」、藏訳には *gtam rgyud ma yin pa rnam par spong ba* とあり、特に藏訳は伝承された話 (Das: *gtam rgyud, ākhyāna*, oral tradition, legend, see also MVP 7128) でないものを棄てることを言っている。ところで、この藏訳には異読があり、プダク写本では先の箇所が *byol song gis rgyud rnams spong ba* となっている。したがって、Harrison が想定するように、やはり原典には *tiracchāna* に相当する語が記されていたと見るほうがよい。この語は、確かに本経や T. 419 が示す「畜生」として理解することもできるが、その一方で、本筋からはずれている様子を表現する場合にも用いられることがある (cf. PTS: *tiraccha*, (adv.)... across, obliquely; in ° *bhūta* deviating, going wrong, swerving from the right direction)。それゆえ、漢訳者が「畜生」と訳しているとしても、その原語や藏訳から「〔伝承から〕はずれて伝わったものを聞こうと望まない」といったような文意を想定することは可能であり、こちらが原意であった可能性が高い。

- (22) 原文は「六味習」。まず原文中に「六味」とあることに関して、『十住毘婆沙論』(T 26, 87c3f.) に引用される対応箇所を参照すると、そこには「三十修六和敬法。三十一常修習五解脱處。三十二除九瞋惱事。三十三斷八懈怠法。三十四修八精進。三十五常觀九相。三十六得大人八覺...」とあり、本経における「六味」に対応する語を、羅什は「六和」と訳していることがわかる。このことから、原文中の「六味」が、本来、和の異体字で「六味」と書かれていたのを誤って伝えている可能性がある。さらに、訳語の混乱について Harrison が指摘している。この指摘は T. 419 が「六堅法已習」と訳すことに関するものである。Harrison は、藏訳対応箇所に *dga' bar byed pa'i chos drug la brten pa* とあることから、原典に *sārāyaṇīya-dharma/samrañjaniya-dharma* (see BHSD, s.v.) と書かれていたことを想定し、T. 419 が「六堅法」とするのは、*sārāyaṇīya* を漢訳者が *sāra* と誤って理解したためとみる (Harrison 1990, 27 fn. 6)。そして、今回と同様の混乱は〈維摩経〉にも見られる。すなわち、原典に *samrañjaniyadharmābhiniṛhṛto'dhyāsayah* (VN 43, 3) とある箇所は、支謙訳では「行六堅法不斷學意」(T 14, 525a22) とあるのに対し、羅什訳には「於六和敬起質直心」(T 14, 543c20) とあり混乱している。尚、これら二法は、後代の注釈では同一視されることがある。cf. 『瑜伽論記』「六堅法者。即六和敬也」(T 42, 815b02-03)。
- (23) 原文は「為五習」。対応箇所は T. 419 では「五度脱常當習」、T. 416 では「熏修五解脱法」となっている。藏訳対応箇所には *nam par grol ba'i skye mched lnga sten pa* とある。
- (24) 原文は「為習八便」。当該箇所は、漢訳異本や『十住毘婆沙論』が引用する対応箇所(註 22 参照)には存在せず、藏訳に *zil gyis gnon pa'i skye mched brgyad la kun tu sten pa* とあるのに相当する。したがって、原文中の「八便」というのが八勝処 *aṣṭāv abhibhvāyatana* の訳語であると見なければならぬ。尚、高麗版には「八便」とあるが、磧沙版などでは「八使」となっている。
- (25) 原文は「為習九思八道家念」。ここでは九思と八道家念の二つが一項目にまとめられているが、T. 419 は「常已習九想行。已行八大人念」として二項目に分ける。藏訳対応箇所を参照すると、'*du shes dgu rnam par 'jig pa... skyes bu chen po'i rnam par brgyad thob pa* として項目が分けられてはいるが連続していない。尚、T. 416 でもこれら二項目は連続して説かれぬ。
- (26) 原文は「聞不貢高」。「貢高」の訳語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 187-188: 貢高 (gōng gāo) “pride, arrogance; is proud, arrogant” (an alliterative compound?).

HD. 10.81b(百喻經); DB 322f(百喻經, 敦煌變文 etc.), DWYC 115f(敦煌變文), ZHYL 166f(中本起經 etc.), Zhu 107(道行般若經 etc.), ZY 229(1992, No.4): 304(do), Yan Qiamao 1997 : 74(六度集經 etc.), TWYC 141(酉陽雜俎, 敦煌變文), Krsh(1998). 166, ZHY 1(2000): 227f.(文殊師利問菩薩署經 etc.), Hu 2002 : 90(般舟三昧經).

Lk. 431b27. 是善男子、善女人……………自在所爲、所語如甘露、所語不輕、瞋恚不生、自貢高不生。(p)

AS. 27.8 = R. 53.16 = AAA. 197.18. *māna*- (“pride”); ZQ. 483c22. 貢高; Zfn. 514a11. 自貢高; Kj. 542a24. 我慢; Xz(I). 773c7. 諂誑矯; Xz(II). 872c28. 諂誑矯 (v.l. 憍); Sh. 595b2. 我慢; Tib.Pk. 31b7 = D. 30a6. *nga rgyal*.

Lk. 431c2. 用學般若波羅蜜故, 不受 (read 愛?) 自瞋恚, 不受 (read 愛?) 自貢高, 不受 (read 愛?) 自可。(p)

AS. 27.10 = R. 53.18 = AAA. 198.6. *māna* ~; not found at ZQ. 483c23; Zfn. 514a14. (不愛) 貢高; not found at Kj. 542a25; not found at Xz(I). 773c9; not found at Xz(II). 873a1; not found at Sh. 595b3; Tib.Pk. 31b8 = D. 30a7. *do*.

Lk. 441c20. 斷般若波羅蜜者, 復有四事。何謂爲四? 隨惡師所言, 一; 不隨順學, 二; 不承至法, 三; 主行誹謗, 四; 索人短, 自貢高, 四。(p)

AS. 92.22 = R. 184.10 = AAA. 403.8. *ātmoṭkarṣin* ~ (“one who exalts himself” [AsP.tr.II 141 = AsP.tr. 61]); SC.11. [*aṭmutk(a)[r]ṣak(o)*] (“do.”); ZQ. 488b5. 自高 (v.l. 自貢高); Zfn. 523b14 = Lk; Kj. 551b5. 自高其身; Xz(I). 801c3. 好自高舉; Xz(II). 885a21. 自讚; Sh. 615c29. 執著我相; Tib.Pk. 111b4 = D. 104a3. *bdag la bstod*(D. *stod*) *cing*. (他六例あり)

- (27) 原文は「求無爲不欲生死」。ここでは「涅槃(無爲)を求める」とあるが、藏訳対応箇所には「涅槃を望まないこと」*mya ngan las 'da' ba mi 'dod pa* とある。尚、「生死」は『道行経』に *samsāra* の訳語として出る。

cf. Karashima 2010, : 生死 (*shēng sǐ*) “birth and death” (a translation of Skt. *samsāra* “passing from one state of existence to another, transmigration.” In older Chinese translations, the word 生死 often corresponds to Skt. *samskāra*, which indicates that its Middle Indic form *samkhāra* was confused with *samsāra*.) Cf. 牢獄 (*láo yù*)

HD. 7.1493b(7)(管代道安《(人本欲生經) 序》 etc.)

Lk. 426a20. 菩薩行般若波羅蜜, 色不當於中住; 痛痒、思想、生死、識不當於中住。(p)

AS. 4.27 = R. 8.6 = AAA. 47.4. *samskāra* ~ (“predispositions”); ps-ZQ. 479a24. 行; Zfn. 509a10. 生死; Kj. 537c5. 行; Xz(I). 764b1. 行; Xz(II). 866b12. 行; Sh. 588a1. 行; Tib.Pk. 5a1 = D. 4b2. *'du byed rnam*s.

Lk. 427c18. 色無著, 無縛, 無脫。痛痒、思想、生死、識無著, 無縛, 無脫。(p)

AS. 11.11 = R. 22.1 = AAA. 91.8. *do*; ps-ZQ. 481a4. 行; Zfn. 510c6. 生死; Kj. 539a10. 行; Xz(I). 767a4. 行; Xz(II). 868c1. 行; Sh. 590b2. 行; Tib.Pk. 13a1 = D. 12b1. *do*.

Lk. 437a18. 行般若波羅蜜者, 不壞色無常視, 不壞痛痒、思想、生死、識無常視。何以故? 本無故。(p)

AS. 57.21 = R. 113.9 = AAA. 299.22. *do*; ZQ. 486a5. 五陰; Zfn. 518c26. 生死; Kj. 546c8. 行; Xz(I). 785a6. 行; Xz(II). 879b18. 行; Sh. 605a18. 行; Tib.Pk. 67b3 = D. 64a2. *'du byed*. (他八例あり)

- (28) 原文は「意無有異」。藏訳対応箇所には *sems las su rung ba* とある。この項目は T. 419 と T. 416 にはみあたらない。

- (29) 原文は「一切滅思想」。「思想」という訳語は『道行経』にも出る。

cf. Karashima 2010, 459: 思想 (*si xiāng*) “perception, recognition” # (a translation of Skt. *saṃjñā*) Cf. 念思想 (*niàn sī xiāng*)

HD. 7.444a(〔公羊傳 etc.])

Lk. 426a19. 菩薩行般若波羅蜜, 色不當於中住; 痛痒、思想、生死、識不當於中住。(p)

AS. 4.27 = R. 8.5 = AAA. 47.4. *saṃjñā* ~ (“perception”); ps-ZQ. 479a24. 想; Zfn. 509a10. 思想; Kj. 537c5. 想; Xz(I). 764b1. 想; Xz(II). 866b12. 想; Sh. 588a1. 想; Tib.Pk. 5a1 = D. 4b2. *'du shes*.

Lk. 427c18. 色無著, 無縛, 無脫。痛痒、思想、生死、識無著, 無縛, 無脫。(p)

AS. 11.11 = R. 22.1 = AAA. 91.8. *do*; ps-ZQ. 481a3. 想; Zfn. 510c6. 思想; Kj. 539a10. 想; Xz(I).

- 767a4. 想; Xz(II). 868c1. 想; Sh. 590b2. 想; Tib.Pk. 13a1 = D. 12b1. *do.*
 Lk. 437a18. 行般若波羅蜜者, 不壞色無常視, 不壞痛痒、思想、生死、識無常視。何以故? 本無故。(p)
 AS. 57.20 = R. 113.9 = AAA. 299.22. *do.*; ZQ. 486a5. 五陰; Zfn. 518c26. 思想; Kj. 546c8. 想; Xz(I). 785a6. 想; Xz(II). 879b18. 想; Sh. 605a18. 想; Tib.Pk. 67b3 = D. 64a2. *'du shes.* (他一例あり)
- (30) 原文は「常念諸佛功德」。藏訳対応箇所には *sangs rgyas thams cad rjes su dran pa* とある。
- (31) 原文は「自歸爲依佛」。「自歸」という訳語は『道行經』にも出る。
 cf. Karashima 2010, 666: 自歸 (zi gui) "puts one's trust in, relies upon"
 HD. 8.1337a(史記 etc.); DK. 9.406a(漢書 etc.)
 Lk. 452b13. 菩薩謙苦安隱於世間護, 爲世間自歸, 爲世間舍, 爲世間度, 爲世間臺, 爲世間導。
 (p)
 AS. 146.27 = R. 293.18 = AAA. 595.27. *śaraṇa* ~ ("refuge" [AsP.tr.II 188 = AsP.tr. 108]); ZQ. 493b5. 自歸; not found at Zfn.; Kj. 561a-4. 歸; Xz(I). 821a10. 歸依; Xz(II). 897b26. 歸依; Sh. 635c22. 歸向; Tib.Pk. 176a1 = D. 163a2. *skyabs* (Pk. *skyobs* [s.e.]).
 Lk. 452b17. 何等爲世間自歸? 生、老、病、死悉度之。是爲世間自歸。(p)
 AS. 147.3 = R. 294.7 = AAA. 596.18. *do.*; ZQ. 493b7. 自歸; not found at Zfn.; Kj. 561b7. 歸; Xz(I). 821b5. 歸依; Xz(II). 897c10. 歸依; Sh. 636a7. 歸向; Tib.Pk. 176a8 = D. 163b1. *skyabs*.
 Lk. 478b5. 書時, 當得好筆, 書好素上。當自歸, 承事, 作禮, 供養(好華)、好香、成搗雜香、澤香、繪綵、華蓋、旗幡。(p)
 AS. 260.18f. = R. 528.4f. = AAA. 990.3f. *sakartavyā gurukartavyā mānāyitavyā pūjayitavyā 'rcayitavyā 'pacāyitavyā* ("one should honour, revere, adore and worship it" [AsP.tr.II 299 = AsP.tr. 224]); ZQ. 508b6 = Lk; not found at Zfn.; Kj. 586b18f. 供養恭敬、尊重、讚歎; not found at Xz(I); not found at Xz(II); Sh. 676b18. 尊重恭敬; Tib.Pk. 311a4f. = D. 285a5. *bkur stir bya bla mar bya rjed par bya mchod par bya ri mor bya bsnyen bkur bya ste.*
- (32) 原文は「從佛地度得可法中」。難読箇所である。異本を参照すると、T. 419は「隨如來住地利得忍辱」、T. 416は「窮盡一切如來道地得勝上忍」とあり、藏訳対応箇所には「出離の道に関して、如來〔への〕段階に対する容認 (**kṣānti*) を得る」*nges par 'byung ba'i lam de bzhin gshegs pa'i sa la bzod pa thob pa* とある。ここでは、声聞や独覺乗で解脱するのではなく、如來となるための長い道のりを行くことを受け入れることが言われていると見る。例えば、『仏説首楞嚴三昧經』には、この事実を受け入れられずに独覺乗に退転しようとする菩薩たちが登場する (T 15, 642a17f.)。当該箇所は「仏地より度すに可を法中に得」と読んで、原文中の「可」が *kṣānti* に相当するとみるべきか。
- (33) 原文は「法中得下」。難読箇所である。異本を参照すると、藏訳では *chos kyi dbyings la 'jug pa* とあり、T. 416は「入眞法界」と訳している。また、T. 419では「已下入法身」となっているが、この「法身」は *dharmakāya* ではなく *dharmadhātu* の訳語であるとみなければならない。その根拠として、T. 419では、藏訳の *chos kyi dbyings* (法界)、*nam mkha'i khams* (虚空界)、*sems can gyi khams* (衆生界) に対応する語を、それぞれ「法身」「空身」「人身」と訳しており、*dhātu* に相当する語を「身」と訳していることがわかる。以上、異本の示唆するところが *dharmadhātu* で一致していることを鑑みると、原文中の「法中」というのが *dharmadhātu* の訳であったか。
- (34) 原文は「以了空意」。藏訳相当箇所には *nam mkha'i khams yongs su shes pa* となっているが、ここでの「意」が *khams* (界) の訳語とは思えない。『道行經』では「意」の語が我 (*ātman*) を指す場合があることが報告されている。
 cf. Karashima 2010, 580: 意 (yi) (s.e. for 我?)
 Lk. 428a24. 何如爲意? 意 (v.l. -) 無處處。意無形。意本是形法。(p)
 AS. 13.9f. = R. 25.21f. = AAA. 111.20f. *ātman* ~ ... *ātman* ... *ātman*; ps-ZQ. 481b8. 我; Zfn.

511a11. 我; Kj. 539b12. 我; Xz(I). 767c16. 我; Xz(II). 869a18. 我; Sh. 591a12. 我; Tib.Pk. 15a8 = D. 14b7. *bdag bdag ... bdag*.

Lk. 428b2. 何所爲意? 意誰字意? 至本本意生; 意は無形。(p)

not found at AS. 13.14 = R. 26.6 = AAA. 112.22. (cf. AS. 13.9f. *ātman* ~ ... *ātman* ... *ātman*); not found at ps-ZQ. 481b13.(cf.481b8. 我); Zfn. 511a18. 我; Kj. 539b17. 我; Xz(I). 767c27. 我; Xz(II). 869a18. 我; not found at Sh. 591a17.(cf. 591a12. 我); not found at Tib.Pk. 15b2 = D. 15a3.

- (35) 原文は「一切佛爲一念」。T. 419 は「一切於佛一其行」、T. 416 には「一切諸佛體無差異」とある。また、藏訳対応箇所には *sems kyi rgyud gcig tu gyur pa* とある。藏訳からは **cetas ekotibhāva* という原語が想定され、これが原文中の「一念」に相当する。しかし、藏訳の文脈における *ekotibhāva* は仏との同体性を意味するのではなく、心の相続の同体性にして心一境性なる状態を指している。
- (36) 原文は「一切人如鏡中像」。異本の対応箇所をみると、T. 419 は「一切世所有如幻」、T. 416 には「一切衆事皆悉如化」とあり、藏訳は '*gro ba thams cad sprul pa dang mtshungs pa* とする。異本では **nirmita* を示す訳語が用いられているが、本経が「鏡中像」と訳した原語は *nirmala* であったか。
cf. 『佛所行讚』 T 4, 27a5: 一切衆生 如觀鏡中。
Buddhacarita 14. 8(d): *dadarsa nikhilam lokam ādarsa iva nirmale*.
- (37) 原文は「一切從法行」。ここでの「法行」というのは、ここまでに列挙された 105 項目を指している。藏訳相当箇所には *chos de rnams* とあることから、ここでの「法行」というのは *dharma* の訳語とみられる。本経ではこの他にも第一章「問事品」の終わりに「何等爲第一法行。是三昧名現在佛悉在前立三昧」(T 13, 904b21-b23) とあり、藏訳対応箇所には *chos gcig po gang zhe na / 'di lta ste / da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin te* とあり、ここでも「法行」が *dharma* の訳語となっている。尚、*dharma* を「法行」と訳す例は支謙訳にもみられる。すなわち、支謙訳『仏説維摩詰経』に、「有八法行。菩薩爲無瘡痂從此忍界到他佛土」(T 14, 533a3-4) とあるのが、梵文対応箇所では *aṣṭābhiḥ kulaputraḥ dharmāiḥ samanvāgato bodhisatvaḥ saḥā lokadhātoś cyutvākṣaṭo 'nupahataḥ pariśuddhaḥ buddhakṣetraḥ gacchati* (VN 97, 16-18) となっている。

〔略号〕

T: 大正新脩大藏経.

T. 416: 『大方等大集経賢護分』(T 13, 872a1-897c15).

T. 417: 『佛説般舟三昧経』 (T 13, 897c26-902c19).

T. 418: 『般舟三昧経』 (T 13, 902c24-919c5).

T. 419: 『拔陂菩薩経』 (T 13, 920a4-924b17).

PSS: *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-Buddha-Sammukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series I. Ed. Harrison, Paul, Tokyo: Reiyukai Library, 1978.

〔参考文献〕

Harrison, Paul. 1990. *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present. An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Sammukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series V. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies. =Harrison 1979 (unpublished doctoral thesis).

—. 1998 *The Pratyutpanna Samādhi Sutra Translated by Lokakṣema*. BDK English Tripiṭaka 25-II. Berkeley California: Numata Center.

Inagaki, Hisao. 1989. "Pan-Chou-San-Mei-Ching 般舟三昧経." 藤田宏達博士還暦記念論集: インド哲学

- と仏教. pp. 4988, 平楽寺書店.
- Karashima, Seishi. 2010. *A Glossary of Lokakṣema's Translation of The Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*
道行般若經詞典, Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XI, Tokyo: The International
Research Institute for Advanced Buddhology Soka University.
- Skilton, Andrew. 2002. "State or Statement?: Samādhi in Some Early Mahāyāna Sutras." *The Eastern
Buddhist*, New Series 34(2): 51-93.
- 梶山雄一他 1992『浄土仏教の思想 第二巻 観無量寿経 般舟三昧経』講談社.
- 末木文美士 1989「『般舟三昧経』をめぐって」『インド哲学と仏教：藤田宏達博士還暦記念論集』pp.
313-332.
- 林純教 1994『蔵文和訳 般舟三昧経』大東出版社.
- 西義雄 1972「般舟三昧の研究資料と其の意義に就いて」『浄土教の思想と文化：恵谷隆戒先生古稀
記念』pp. 1265-1286, 佛教大学.
- 能仁正顕 2018『仏説般舟三昧経序説』永田文昌堂.
- 山口益編 1974『仏教聖典』平楽寺書店.

(ふきた たかのり 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)
(指導教員：松田 和信 教授)
2019年9月30日受理